



現地レポート

ホンジュラスの放課後

吉川 宗明

JICA 現地コンサルタント・ホンジュラス在住

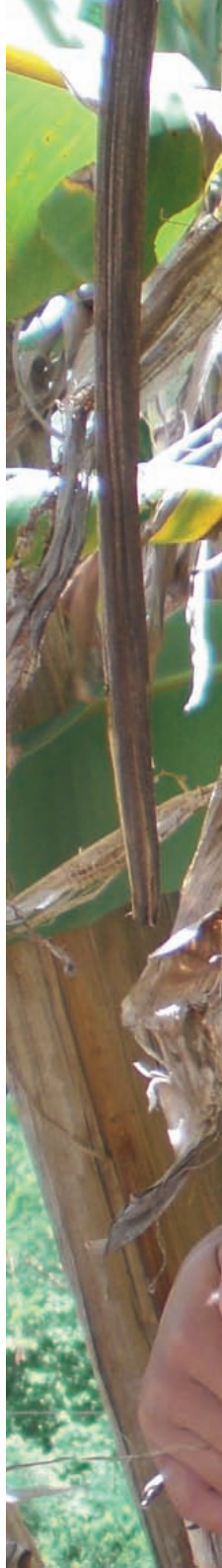
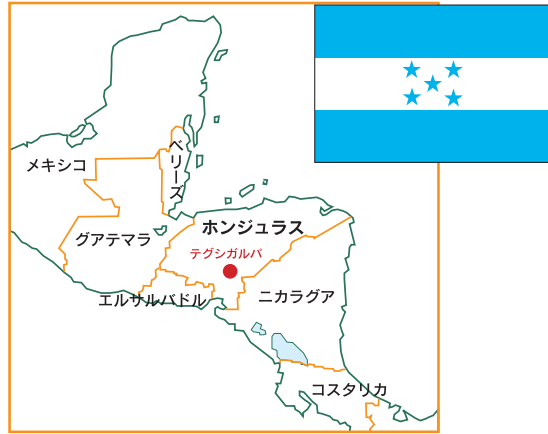
ホンジュラスは、よく「50年前の日本」と言われる。教育に関しても後進国で、識字率は80%。地方での識字率はさらに低い。義務教育は小学校6年生までであるが、小学校就学率は87%。学歴社会が浸透し始め、社会の教育に対する関心は少しずつ高まっている。

ホンジュラスには受験勉強が存在しない(大学では基礎学力試験が課せられるようになってきている)。しかし、小学校から落第制度があり、授業中の緊張感是比较的高い。成績の評価をするのは先生なので、学校にいる間の子どもの関心は、先生から良い成績をもらえるようにすることに向かうようだ。厳しい先生の授業では緊張感もいっそう増す。だからこそ、放課後の開放感には、子どもたちにとっても何にも変えがたいものなのだ。

ホンジュラスの位置する中米諸国には、大きな貧富の差が存在し、経済的に恵まれた家庭の子どもと貧しい家庭の子どもとの生活様式はまったく違う。裕福な家庭の子は、バイリンガルスクールに通い、放課後はクラブ活動やスイミング、バレエなどの習い事、家庭教師から補習授業を受けたりする。通学には、スクールバスや自家用車を利用するので、裕福な家庭の子どもたちには寄り道の自由がない(お母さんの寄り道にはよく付き合わされているようだ)。それでも、お迎えが来るまでの時間は、彼らにとって友だちとの貴重な自由時間であり、わずかな時間を気の合

Republic of Honduras

よく遊び、よく学べ。もはや日本では現実離れた言葉かもしれない。しかし、ホンジュラスの子どもたちは、よく遊んでいる。自分の、自分たちの遊びをつくっている。楽しんでいる。そして、小さい子ども大きい子ども、男の子も女の子も一緒に遊んでいる。楽しんでいる。



う友達とブランコや追いかけっこ、おしゃべりなどで過ごす。宿題をする子、ボールとする子、ひたすら門の前で迎える待つ子など、さまざまな情景が見られる。

貧しい家庭の子は、極端な場合は学校に行かせてもらえず、放課後自身が存在しない。また、都市部は子どもの数が多く、公立学校は2部制・3部制になっていて、授業が終わると学校から追い出されてしまうので、寄り道が一番の楽しみとなる。通学路の木陰で友だちと一緒に宿題をする子や、かばんを放り出して制服を泥だらけにしながら空き地でサッカーボールを追いかけ回す子どもたちの姿は、この国のどこに行ってもよく見かける光景である。給食がないので、駄菓子の買い食いも彼らの楽しみのひとつだ。

地方の学校は、午前と午後の授業の間に昼休みがあり、子どもたちは昼食を食べに家に戻る。時間の感覚も都市部と違い、ゆったりしているので、子どもたちもほんわかとしている。もちろん、校庭での居残りサッカーは皆の楽しみだ。しかし、彼らの放課後には遊びだけではなくお手伝いも待っている。薪拾いや水汲みは、子どもたちの日課なのだ。道具が木の実をもちだり、川で泳いだりとお手伝いしながらちやっかり楽しんでもいる。都市部では家業を手伝ったり、物売りをする子どもも多い。夜間部に通う子どもたちの中には、日中は働いているという子どもも少なくない。そういう意味では、日本の子ども



働くということが、子どもたちの暮らしのすぐ近くにある。なぜ、働くことが必要なのか、それは生きることだからということが伝わってくる。彼らが仕事を手伝っているときの眼差しは、目の前の作業を超えて、未来を見通すかのように真つすぐで、強く、やさしい。



子どもには遊びから学ぶこと、学ばなければいけないことがたくさんあると思う。遊びの中から、新しいことを発見し、身体も鍛えられ、対人関係のつくり方やルールの守り方なども学ぶ。大人たちが「暇があったら勉強しなさい!」とか、何でもかんでも「危ない!」とばかり言っていると、子どもは「遊ぶことはダメなんだ」と考えてしまうかもしれない。ホンジュラスの子どもたちは遊ぶために放課後を過ごしている。ボクの幼い頃は、学校から帰って家にいると「天気が良いんだから、外に行つて遊びなさい!」と母にしかられた。学校の休み時間も教室から追い出された。外遊びが大好きになって、いつまでも外にいと、今度は「暗くなったから帰つてきなさい!」としかれた。ここホンジュラスには、まだまだそんな子どもがたくさんいる。

そう言えば、この大人たちもよく遊ぶ。道端で友と会っては語り合い、平日の夕方や週末は草サッカーに励む。代表チームの試合があれば、皆テレビの前に陣取り、試合に勝てば通りに繰り出し、夜通しのパレードでドンチャン騒ぎ。翌日には、勝利を祝ってレストランが半額に

Republic of Honduras

レンズに向けられる彼らの顔は明るい。楽しい、美しい、子どもらしい。作り物の笑顔ではない。なぜだろう。夢と希望があるからではなかろうか。大きくなりたいという意志があるからではなかろうか。明日はもっと面白いと思っているからではなかろうか。



なったりする。クリスマスや正月は家族で集まり、爆竹を鳴らして孫も娘もお祖父さんも抱き合ってお祝いする。結婚式や誕生パーティーでは老若男女、皆踊る。仕事しなければいけないときにも遊んでしまうほど、大人も大の遊び好きだ。

ボクが延べ10年になるホンジュラス生活から感じることは、大人が幸せそうに生きていると、子どもたちも大人になりたいと思うということだ。そして、子どもが幸せそうにしていると、大人はさらに幸せになる。だから、子どもたちが無邪気に遊べる放課後の存在は、社会の幸せに大切なことなのだと思う。

ふるかわ むねあき

1971年生まれ。東京学芸大学初等教育教員養成課程保健体育専修卒業。1994年より海外青年協力隊体育隊員としてホンジュラス国立教育大学に3年間勤務。帰国後、風の谷幼稚園(川崎市)教諭を経て、2002年再びホンジュラスへ。バイリンガル・スクールの体育教師を経て、2004年から国際協力機構(JICA)の「地方女性のための小規模起業支援プロジェクト(MeM)」に従事。延べ10年間のホンジュラス在住歴。ホンジュラスで知り合った妻と共に、3児の父として楽しい毎日過ごす。日本の皆さんへ、「もっと放課後に子どもを遊ばせてみませんか?」

